

2025. 5. 11 (日) ルカ24:36~43

24:36 これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。

24:37 彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。

24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。

24:39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。」

24:40 こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。

24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっていたので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。

24:42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、

24:43 イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。

#### <説教>

本日朗読されました聖書の始めには〈これらのことを話していると〉(36)とあります。どんな話しをしていたかという、先主日に読みました、直前の34節と35節に書かれている話です。クレオパともう一人の弟子の二名がエマオという村からエルサレムに戻って〈十一人とその仲間〉のところに行くとき彼らが「本当に主はよみがえって、シモンに姿を現された」と話していました(34)。それで二人も自分たちがエマオに向かう途中で、そのときは誰だか分からなかったけれども実は復活なさったイエスと出会い、道々イエスから直接イエスについての聖書の説き明かしを聞いたこと、そしてエマオの家の食卓でイエスがパンを取って神をほめたたえ、裂いて自分たちに渡してくださったときにそのお方がイエスだと分かったことの次第を話したのです(35)。

そうしているところに〈イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われ〉(36)ました。〈平安〉は「平和」とも訳せる言葉です。イエスがこの地上に人としてお生まれになったとき、御使いたちが「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」と言って神を賛美したことをルカは記しました(2:14)。その平和(平安)は、人としてこの地上にお生まれになったイエスにある平和(平安)です。私たち人の罪をその身に負われて十字架で死なれ、墓に葬られ、三日目に復活なさったイエスによって、イエスを通して与えられる平和(平安)です。数限りない罪を犯している罪人なのに、罪を赦され、イエスとともにパラダイスに入る(23:43)ことを約束されている平和、神の怒りを免れ、神と和解させていただいている、神との平和です。イエスの復活を信じ、復活のイエスを信じて本当の平安、平和をイエスから受けるように、とイエスは言われました。また、そのイエスが弟子たちの〈真ん中に立ち〉なさったことで、イエスこそ弟子たちの「主(人)」として弟子たちのその思いとことばと行い、また彼らの集まり、交わりの中心におられるべきお方であることをお示しになりました。

さてそのようにせつかくイエスが平安を与えるべく弟子たちの真ん中に現れてくださっ

たのに、〈彼らはおびえて震え上がり、幽霊（直訳「霊」）を見ているのだと思った〉、そんな始末でした(37)。〈そこで、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを抱くのですか。」〉(38)。彼らはイエスが本当に復活してペテロに姿を現されたこと(34)を聞かされており、またクレオパら二人からもエマオ途上と家での出来事を聞かされていました。そうやってイエスの復活を信じつつありました。しかし、やはりいざ自分たちの目の前に現れ立たれた復活のイエスがの姿を見ると、ペテロも、クレオパたちも、そして他の弟子たちも、それは霊だと思って〈取り乱し〉〈心に疑いを抱〉いたのでした。なお、ヨハネの福音書によれば、彼らのいた場所は〈戸に鍵がかけられていた〉(ヨハネ 20:19,26)にもかかわらずイエスがそこに来られて彼らの真ん中に立たれたのでした。彼らが霊を見ていると思ったのはそういうこともあってのことだったとは思いますが。がそれにしてもやはり、一度死に、墓に葬られたイエスが、そのからだをもって復活したと信じることは弟子たちにとってはそんなに簡単なことではなかったのです。「イエスが復活なさったと言っても、やはりからだまで復活するなんてことはあり得なかったか。どこまでも霊の話だったのか。」そんな「疑い」「取り乱し」、落胆が弟子たちの心に起こったのだと思います。霊を見て怖いと思った（幽霊と訳せばまさにそんな感じですが）という面もあったとは思いますが。

そんな弟子たちに対するイエスのみことば、そしてみわざが続きます。〈わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。幽霊なら肉や骨はありません。見て分かるように、わたしにはあります。〉こう言って、イエスは彼らに手と足を見せられた。(39-40)。十字架で死なれたご自分が霊の姿で現れているのではなく、〈手〉〈足〉〈肉や骨〉といった復活のからだをもった姿で現れていることをイエスは強くお示しになりました。〈手と足〉には十字架につけられた釘の跡がもちろんありました。自分たちの目の前にまるで幽霊のように驚くべき、恐れるべき、不思議な仕方現れたイエスですが、それは断じて幽霊ではなく、見て、さわることができる「からだ」をもった十字架と復活のイエスに間違いのないということをイエスは弟子たちに確認させなさいました。

そうやってイエスの復活のからだを直に〈さわって、よく見〉た弟子たちは確かに〈喜び〉ました。しかし彼らは次には〈喜びのあまりまだ信じられず、不思議がってい〉ました(41)。イエスのからだをもつての復活についての喜びの感情を抱いてさえ、なおイエスのからだをもつての復活を信じられず、不思議に思う。それほどどこまでも疑い深く、〈愚か〉で〈心が鈍い〉弟子たちをイエスはなおもあわれんでくださり、次なるみことばとみわざを見せてくださいました。

〈イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で召し上がった。〉(41-43)。イエスは弟子たちの〈弱さに同情〉(ヘブル 4:15)してくださいました。弟子たちの前で食事をすることで、「復活のイエスは霊だけの存在なのではないか。からだの復活は本当だろうか」という弟子たちの疑いに対して決定的に反論し、ご自分がまさしくからだをもって復活なさったことを決定的に証明してくださいました。ご自分が「死んでも生きている」ような霊として生きているのではなく、十字架にかけられて死なれ、墓に葬られたご自分のからだ復活して〈まさしくわたし〉として生きておられる（もちろん聖霊と共に）ことをイ

イエスは明らかにお示しになったのです。

その意味でイエスは十字架の前と後でも変わらない、同じお方です。ただ一つ違うことと言えば、それはもやは「人としての弱いからだ」をまとう必要がなくなったことです。つまりもう二度と死なない、死ぬ必要がないからだをもって復活なされたということです。イエスは一度限りの十字架の死によって、私たちの罪のための死、贖いのみわざを完全に成し遂げられ、かつそのからだをもって復活なさいました。そのように人として復活なされたイエスのからだは、もう二度と死なない、死ぬ必要もないからだ、死にも打ち勝ったからだ、即ち栄光のからだです。このイエス・キリストが〈万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます〉(ピリピ 3:20)。イエスが「まさしくわたしです」と、ご自身のからだをもって復活なされたように、イエスを信じる私たちも、それぞれが「まさしく私」の死ぬべき〈卑しいからだ〉からだをイエスの〈栄光に輝くからだと同じ姿に変え〉られて「まさしく私」として復活させていただくのです。「我は…からだのよみがえり…を信ず」とはそのような信仰告白なのです。